

# 「医学用語は面白い」

戸次 弑子  
国家公務員共済組合連合会  
浜の町病院 診療録管理室  
分類小委員会委員

私が属している団体のメーリングリスト上でM先生が紹介してくださった「反＝紋切型医学用語《解體新書》」という本は、医学用語の成り立ちのあれこれが載っていて面白い。「帝王切開術」という用語が、かのローマ帝国のシーザーの名前に因んだという伝説（信憑性は低い）は私も知っていた。随分以前、外国の人が日本人の友達を見舞いに当院を訪れた時、ファーストネームしかわからず困っていたが、産科患者であることがわかり、試しに言った「cesarean section」から患者さんが判明したことがあった。雑学が身を助けた？例である。

医学用語はラテン語源からのものが多いと思っていたが、ギリシャ語源が多いというのも初めて知った。例えば半分を意味する言葉に「hemi」「semi」があり、腎を示すのに「nephro」と「reno」がある。あるいは卵巣切除術に「oophorectomy」「ovariectomy」があるが、これらもギリシャ語ラテン語の違いだそうである。

また同じ疾病を表すバセドウ病とグレーヴズ病はドイツ語圏と英語圏の違いというが、ドイツ医学を取り入れた日本ではバセドウ病が多く使用されているのも納得である。そういえば診療録管理の仕事についての昭和40年代は、診療録に書かれた診断名や手術名・経過記録は勿論、医師や看護師の話し言葉の中にもウロ、ギネ、クランケ、アナムネ、エントラッセン、ステッタ等ドイツ語（もどき）が交じっていた。今でも覚えているのは経過記録中の「Sibire」と言う単語だ。独語辞書を引いてもわからない「Sibire」が、単に「しびれ」と言う日本語だったのにはがっくりした。その後はじまった通信教育で、英語医学用語が規則性を持って出来ている事を知って面白いなと思った。語根、接頭語、接尾語等を覚えれば初めての用語でも見当をつける事が出来る。この“見当をつける”という事は何事においても大切なことだ。

一方、日本語の医学用語は大層難しく「橈骨」「壊疽」「播種」「舟状骨」等、簡単には読めないものが多い。「増悪」を「ぞうお」と読むことの誤りをこの本で知り、今まで口にしていたことを思っ恥ずかしくなった。

以前、サスペンス物の小説を読んでいた折りに「ベルチオンの人体測定機」なるものが重要なヒントとして何度も出てきた時、私は思わず「死因分類のベルチオン」と同一人物と思ってしまった。その理由はこの本の作者が現役の医師であること、1890年代という同時代であることだった。珍発見でもしたような気がした私は、作者に問いあわせようかとも思ったが、まず自分で調べてみた。結果は残念ながら統計学者と人類学者という別人物であった。しかし、二人ともフランス人で年齢も3歳しか変わらない。きっと兄弟かもしれないと、私は今でも勝手に想像している。

時はまさに読書の秋。受講生の皆さんも勉強の合間にちょっと肩の力を抜いて、医学用語にまつわる本など楽しまれてはいかがでしょうか？